



# BOOGAMANIA



## 第二部

005 対面

006 診断

007 決別

008 譲渡

湖南徹

## BOOGAMANIA (005) : 対面

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子は、絵瀬記念病院に到着した。

病棟を見上げる。

絵瀬記念病院は、ネズミコー・グループが一五〇〇億円を投じて建設した総合病院だ。全幅四五〇メートル、全高七五メートルもある。バロック様式・ロココ様式・アンピール様式・チューダー様式の装飾が至る箇所に施してあり、ベルサイユ宮殿が掘っ立て宿に見えてしまう。観光名所にもなっている。

建物を立派にしたのは、そうすれば馬鹿でアホで脳足りんで間抜けで頓馬で唐変木でスットコドッコイでプンプクリンでアンポンタンでチンチクリンでプンプンでポレポレポレでフニャフニャホニャでポッテポッテな患者が大勢やって来るからだ。立派なら、高い治療費を吹っ掛けられても、馬鹿でアホで脳足りんで間抜けで頓馬で唐変木でスットコドッコイでプンプクリンでアンポンタンでチンチクリンでプンプンでポレポレポレでフニャフニャホニャでポッテポッテな患者は「これくらい立派な病院なのだから、治療費が多少高くても仕方ない。自分はその分高度な治療を受けているのだ」と勝手に納得してしまう。

院内で勤務する殆どの医師が低知識のヤブで（医師免許を取得しているのかも疑わしい）、看護師（資格を取得しているのかも疑わしい）はどれも虐待好きで気に入らない患者に暴力を振るっていて、裏で患者を「カモ」「カネヅル」「ATM」「丸太」と蔑んでいるなんて、予想すらしていない。

馬鹿でアホで無知で無能な庶民は結局建物の外観や内装にバンバン騙されるのである。

金田金子はドイツ製超高級車マイバッハ62Sから下りると、さっさと中に入った。

病院内部は、外装と同様、広く、豪華絢爛だった。天井も高く、中世の聖堂並みだ。サーカスが出来る。実際、ロシア連邦サーカス公団ーポリショイサーカスーを招き、公演させた事もある。象が糞尿を撒き散らし、衛生上の問題が発生したが、そんな事はお構い無しだった（元々衛生状態が悪く、院内感染が頻発していた事もある）。

金田金子は受付に向かった。

受付係は、必要以上の美観を誇る若い女性だった。顔だけで採用されたのは明白である。美容整形手術を七八回も受けていて、実年齢は履歴書で記入した数値の三倍である事等、殆どの人は知らない。

「主人はどこ？」

と、金田金子は無愛想に訊いた。

通常の来院者だったら、こんな質問をしても、受付係から「誰だよ、お前」といった応対を受ける。

しかし、整形顔と豊胸手術を受けたバストと性交回数だけが自慢の、低月給で低能の受付係も、病院のオーナーの奥方の顔は知っている。『ああ、あの玉の糞馬鹿アホ女か』と。

「お連れします」

と、受付係は迷路の様な院内を案内した。

事実、迷路になっているらしい。迷子になって院内を何ヶ月もさまよい、最終的には餓死したと思われる患者の遺体があちこちに転がっている。腐敗して鼻を曲げる異臭を放ち、ハイエナやハゲタカや蛆虫の餌食となっていた。

「こちらです」

と、案内係は院長室の前で止まった。マホガニー製の分厚いドアをノックする。「院長、奥様をお連れしました」

「どうぞ」

と、中から声がする。

金田金子は院長室に入った。

院長室は、病棟の外観以上に立派な、広大な部屋だった。

患者から吸い上げてきた――筆り取ってきた――金を湯水のように注ぎ込んで購入した贅沢品が至る所にある。壁にかかっている絵画も、ゴッホやゴーギャンやピカソなど、美術館に収められていても不思議でない代物ばかりだ（残念ながら、全て悪徳アートディーラーが馬鹿でアホで脳足りんで間抜けで頓馬で唐変木でスットコドッコイでプンプクリンでアンポンタンでチンチクリンでプンプンでポレポレポレでフニャフニャホニャでポッテポッテが経営陣を占める絵瀬記念病院側の為に特別に作成した贋作だが）。

精気がムンムンと感じられる五〇代の男性――院長の絵瀬石雄――が、出迎える。

絵瀬記念病院にしては珍しく、技術が確かな医師だ。というか、当院で唯一腕が良い医師といっても良い。裏金で入学し、金で学位や地位を買い、陰謀でライバルを次々と葬ってはいたが、勉学には熱心だったのだ。

権力・金銭崇拜主義で、権力や富を獲得する為には手段を選ばないのが玉に瑕である。

ただ、患者に対し不遜な態度を取るのが当たり前と思っている絵瀬石雄院長も、流石に世界最大のIT企業グループ――ネズミコー・グループ――の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子の前では若干低姿勢である。

「どうぞ、おかけ下さい」

金田金子は、勧められた豪華なイタリア製の革張り椅子（と、納入業者は絵瀬記念病院側に言っていたが、実はベトナムの日雇い労働者によって製作された安いイミテーション）に、当たり前のように腰掛けた。

「先生、主人はどうしたんですの？」

絵瀬石雄院長は、顔を歪めた。言うべきか、言わないべきか、どう表現すべきか、迷っている様だ。

金田金子は、苛立ちを隠す事無く、

「先生、主人はどうしたんですの？ さっさと行って下さい！」

「残念な事ですが……」

金田金子は蒼白になった。

「主人は……、死んだのですか？」

「いえ、違います、奥様。……寧ろ、そうだった方がまだ良かったかも知れませんね」

金田金子は首を傾げ、

「どういう意味ですか？ 主人は不治の病に？ 癌とか？ 糖尿病とか？」

絵瀬石雄院長は頭を掻いた。

「癌や糖尿病だったらまだマシです」

「癌や糖尿病より酷い病？」

「ええ。その……BOOGAMANIAです」

金田金子は首を捻った。

「ブーガマニア？ 何かの趣味ですか？」

「違います。病名です」

「聞いた事ありません」

「私も最近知った病です。かなり昔からあったそうですが……」

「どんな病気なんですか？」

「分かりません」

「分からない？」

「ですから、これまで聞いた事も無い病ですので……」

「主人はどこですか？」

「特別隔離室にあります」

「特別隔離室？ 何です、それは？」

「患者を隔離する為の特別な部屋です」

説明になっていない。

「無菌室みたいなものでしょうか？」

「無菌室とはちょっと性質が異なりますが、ま、患者を外部から隔離する、という意味では同じ  
でしょうね」

「主人に会わせて下さい」

絵瀬石雄院長は首を横に振り、

「無理です。危険です」

金田金子は蒼白になった。

「危険？ どういう意味です？」

「危険だ、という事です」

説明になっていない。

「会うのは無理？」

「会うのは無理ですが、観察する事は可能です」

と、絵瀬石雄院長は言うと、立ち上がった。「こちらです」

金田金子は院長の後に続いた。

迷路の様な院内を進む。遭難して餓死したと思われる蠅に塗れた死体や、蛆虫が湧いている死体の横をいくつも通り過ぎた。

「ここです」

と、絵瀬石雄院長は、ドアの前で足を止めた。

『特別隔離室観察室』となっていた。

「……覚悟は出来ていますか、奥様？」

金田金子は訳が分からなかったが、

「はい」

絵瀬石雄院長はドアを開けた。

金田金子は、その部屋が様々な医療機器を並べた病室となっていて、ベッドに横たわる夫がいる、と思っていたが、違った。

何も無い、真っ白な部屋だ。

奥の壁に黒い厚手のカーテンがかかっているだけ。

広さは五平米程度。

天井の蛍光灯のお陰で、暗くはない。掃除だけは入念にしてある様だ。

空調の音だけが耳に響く。

金田金子は戸惑いながら部屋に踏み込んだ。

絵瀬石雄院長は部屋の奥まで歩んだ。カーテンの横に立つ。右手でカーテンを開く為の紐を掴み、左手は壁に設けられたスイッチに触れた。

「……奥様、もう一度聞きます。覚悟は出来ておりますか？」

「出来ています」

「本当に出来ておりますか？」

「出来ています」

「本当に本当に出来ておりますか？」

「出来ています」

「本当に本当に本当に出来ておりますか？」

「出来ています」

「本当に本当に本当に本当に出来ておりますか？ 二〇〇パーセントの覚悟は出来ていますか？」

「来ています！」

絵瀬石雄院長は息を大きく吸うと、スイッチを押し、紐を引いた。

カーテンがサッと横に引かれるのと同時に、スピーカーが稼動した。

『BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！』

カーテンは、大き目の窓を隠していた。

窓の向こうには、部屋があった。そこが特別隔離室の様だ。

家具が一点も無い、殺風景な空間だ。三面が壁に囲まれている。窓は、前室と面する壁にあるだけ。屋外を望める窓は無い。広さは、観察室とほぼ同じ。

特別隔離室には、人間らしい生物がいた。

『らしい』としか言えないのは、超高速で室内を旋回していて、見えないからだ。

「……？」

金田金子は窓の直ぐ側にまで近寄った。

何が何だか分からなかったのだ。

……と、その時。

動き回っていた生物が、窓の向こう側にへばり付く形で止まった。

『BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！』

「ヒッ」

と、金田金子は悲鳴を上げると、窓から飛び退いた。

『BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA !』

金田金子は、生物を注視した。

アッ、と声を上げる。

――夫の金田金太郎。

いや、『夫の金田金太郎だった生物』が正しい。

全裸で、髪を振り乱し、悪魔そのものの形相で奇声を上げる姿は、今朝見送った夫の金田金太郎とはかけ離れていた。

「……あなた？」

『BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA !』

と、金田金太郎は喚くと、窓――強化ガラス製と思われる――に、額を機関銃のペースで打ち付け始めた。厚さ一五センチのガラスが衝撃で振動する。

金田金太郎の額があっという間に切れた。ガラスに鮮血が付着する。

『BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA ! BOOGAAAAAAAAAAAA !』

それでも金田金太郎は額を打ち付け続けた。

「ヒイイッ」

と、金田金子はまた悲鳴を上げ、窓から後退した。

金田金太郎は窓にへばり付くのを止めると、今度は床に頭を打ち付け始めた。全力で頭を打ち付ける。鼻が折れたらしく、鼻腔からも大量出血した。

鮮血が飛び散る。

『BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！』

「主人は一体……」

と、金田金子が口にした時。

金田金太郎は頭を床に打ち付けるのを止めた。血塗れの顔を、窓の向こう側の妻に向ける。肩で息をしていた。

『……BOOGA。……BOOGA。……BOOGA。……BOOGA』

金田金子は涙を浮かべながら窓に再度接近した。

『BOOGAAAAAAAAAAAA！』

その奇声と共に、金田金太郎の口から吐瀉物と血が混じったらしい、何とも言えない色の液体が噴水の如く吹き出た。

窓が気味悪い、粘り気のある液体で染まっていく。

「ヒイイッ」

と、金田金子はまたまた悲鳴を上げ、窓から後退した。足がもつれて尻餅をつき、失禁する。

絵瀬石雄院長はカーテンを閉じ、スピーカーをオフにした。

「……ご覧になられた様に、ご主人は重症です。申し訳ございません」

「な、何ですか、今のは？」

「ですから、あれがBOOGAMANIAです」

金田金子は涙を流しながら、

「一体どうなってるんです？」

## BOOGAMANIA (006) : 診断

絵瀬記念病院の絵瀬石雄院長が、苦悩に満ちた顔で、

「ご主人はBOOGAMANIAを発症したのは疑いようの無い事実です。非常に残念な事ですが」

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子は、困惑の表情で、

「でも……、BOOGAMANIAなんて病気、聞いた事ありません」

二人は、贅の限りを尽くした広大で豪華で悪趣味な院長室に戻っていた。

金田金子は、夫の変わり果てた姿を見て、ショック状態にあった。平然としていられたら、それこそ精神疾患を抱えている。

何故こんな目に遭わなければならないの、と思う。世界中の誰もが羨み、幸せが一生どころか一〇生保証されている筈の超スーパー・ウルトラ・ハイパー・ダイナマイト・セレブの自分が、と。

「BOOGAMANIAは……、かなり前から存在が知られていた疾患です。一部では。最近は徐々に一般にも知られるようになっていきます」

――自分はその『一般』に入らないらしい。

と、金田金子は嘆いた。

「どんな病気なんですか？」

「見ての通りです。発病した者は、『ブーガ』しか考えられなくなる。『ブーガ』しか言えなくなる。人生が『ブーガ』だけになってしまう。というか、人生が『ブーガ』そのものになってしまう。そういう病です。恐ろしい病です。悔しい病です。卑しい病です。悲しい病です。淋しい病です」

ちっとも説明になっていない。

この程度で医師免許を取得しているとほざくのだから笑わせる。

「『ブーガ』とは何なんですか？」

「不明です。患者にしか分からない。いえ、患者にも分からないのでしょうか。とにかく、頭の中が『ブーガ』で一杯になってしまい、論理的な思考が一切出来なくなるのです」

やはり説明になっていない。

医師免許は金で買ったものなのだろう。

金田金子は息を大きく吸った。発病してしまった以上、ジタバタしてもしょうがない。どう対処するのか。それを考えるべきである。

「先生、治療はどのような風に進めるんですか？」

絵瀬石雄院長の顔が、一層苦悩に満ちる。

「BOOGAMANIAに治療法は現在確立されていません」

金田金子は、革張り椅子から飛び上がった。

奈落の底へ突き落とされる、というのはこういう事か。

「治療法は無い？ で、でも……。それでは、主人はどうなるんです？」

「ずっとあのままですな」

「ずっとあのまま？」

「そうです。ずっとずっとあのままですな」

「ずっとずっとあのまま？」

「そうです。ずっとずっとずっとあのままですな」

「ずっとずっとずっとあのまま？」

「そうです。ずっとずっとずっとずっとあのままですな」

金田金子は蒼白になった。まさか不治の病だったとは……。何故世界中の誰もが羨み、幸せが一生どころか一〇生保証されている筈の超スーパー・ウルトラ・ハイパー・ダイナマイト・セレブの自分が、こんな目に、と嘆く。

ますます奈落の底へ突き落とされた気分になった。

「主人を大人しくさせる事は出来ないんですの？ あのままでは、大怪我しますわ」

「あの段階に至ると、大人しくさせるのは不可能です。他人に迷惑がかからないよう、頑丈な部屋に閉じ込めるくらいしか出来ません。現に、病院に運ばれて来てから、あの部屋に入るまで、ご主人は大暴れしまして。救護士四名、警察官二八名、看護師八〇名、弁護士三六〇名、社会保険労務士一〇名、税理士三名、介護福祉士五名、保育士一八名、司法書士七名、公認会計士四名、第一級建築士一名、宇宙飛行士一名、臨床心理士三名、消防士四名、行政書士一名、弁護士八〇名、三銃士一名が全治六ヶ月の大怪我を負いました」

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子にとって、低月給の救護士、警察官、看護師、弁護士、社会保険労務士、税理士、介護福祉士、保育士、司法書士、公認会計士、第一級建築士、宇宙飛行士、臨床心理士、消防士、行政書士、弁護士、三銃士が全治六ヶ月の負傷になろうと、殺されようと、関係無い。

勝手に死ねばいいのである。

というか、それで給料を貰ってるんでしょ、としか思えない。

「でも、あのままでは主人は怪我をします」

絵瀬石雄院長は当たり前のように頷いた。

「ええ、怪我をするでしょうね」

アホみたいな発言に、金田金子の頭に血が上った。

「怪我をしたら死ぬかも知れないでしょう！」

絵瀬石雄院長が、どう説明すればいいのか分からない表情になった。暫く考えた後、

「えーと、その……、怪我しても大丈夫なんです」

金田金子は訳が分からなくなった。

「怪我をしても大丈夫？」

「BOOGAMANIA患者は、治癒力が大幅に高まります。切り傷程度だったら一分以内で完治します。大動脈切断の様に、一般の人にとっては致命傷に成り得る大怪我でも、三〇分以内で完治します」

金田金子は何と返事すれば良いのか分からなくなった。

「……それは、その……。凄いですね」

「ええ。これであの『ブーガ』がなかったら、超人になれる。スーパーマンになれる。ウルトラマンになれる。レインボーマンになれる。マッチョメマンになれる。アイアンマンになれる。バットマンになれる。スパイダーマンになれる。アンパンマンになれる。ジャイアントマンになれる。キン肉マンになれる。バリアフリーマンになれる。カナディアンマンになれる。クリオネマンになれる。ゴージャスマンになれる。チヂミマンになれる。コンドルマンになれる。ダークマンになれる。ミラーマンになれる。ホテルマンになれる。バナナマンになれる。サンドウィッチマンになれる。テレビマンになれる。サラリーマンになれる。キッコーマンになれる。ルサンチマンになれる。ヒュー・ジャックマンになれる。筋力も大幅にアップしますんでね」

「主人は……、その、いつまであのままですか？」

「死ぬまでです。不治の病ですから」

金田金子は苛立ちを隠さなかった。

「それは分かっています。余命はどれくらいなんですか？」

絵瀬石雄院長は頭を掻いた。

「不明です」

「寿命が縮む、という訳ではないんですね？」

「ええ。というか、寧ろ延びます」

金田金子は首を捻った。

「寿命が延びる？」

「BOOGAMANIA患者は、治癒力が高まるのと同時に、老化現象が低下します。これまでのBOOGAMANIA患者で、死亡した者は今のところ一人もいません」

金田金子はますます訳が分からなくなった。

「これまでBOOGAMANIAを発症した患者は全員生きている？ まだそんなに新しい病気なんですか？」

絵瀬石雄院長は首を横に振った。

「最初に報告されたケースは二五三年前です」

「二五〇年前？ それなのに、BOOGAMANIAを発症した者で死亡者はいない？」

「そうです。最初に報告された患者も、まだ死んでいません。生きています。物凄く元気です。ピンピンしてます。ピンピンです。朝立ちもあります。昼立ちもあります。夕立ちもあります。夜立ちもあります」

金田金子は、思わず笑ってしまった。

「じゃ、その患者は二五〇歳になりますわ。それでも生きている？」

「その患者は四〇代に発症したそうです。ですから、三〇〇歳近く、いえ、三〇〇歳以上になっているかも知れません」

金田金子は椅子から飛び上がると、

「三〇〇歳の間人なんている訳ないでしょう！」

「通常は、人間が三〇〇年も生きる事はありません。ですが、BOOGAMANIA患者は、三〇〇年以上生きていられます。少なくとも、生物学的には。人間としては生きていたとは言い難いですが。何にせよ、『ブーガ』しか考えられない、言えないんですからね」

「……となると、主人は今後何百年もあのまま？」

「残念ながら、そうです」

金田金子は泣けばいいのか、怒ればいいのか、笑えばいいのか、『猫じゃ猫じゃ』を踊ればいいのか、分からなくなった。

「そんな馬鹿な」

「馬鹿な事ではありません。アホな事です。脳足りんな事です。間抜けな事です。頓馬な事です。唐変木な事です。スットコドッコイな事です。プンプクリンな事です。アンポンタンな事です。チンチクリンな事です。プンプンンな事です。ポレポレポレな事です。フニャフニャホニャな事です。ポッテポッテナ事です。不治で不死の病ですからね。始皇帝を始め、人々は不老不死を求めますが、あんなのは誰も求めていないでしょう」

「BOOGAMANIAの原因は何なんですか？」

「不明です。感染症ではないですし、遺伝性疾患でもありません。ある日突然発病するのです」

「私はどうすればいいんですか？」

絵瀬石雄院長は腕を組んで暫く考えた。

「ご主人を黙って見守るしかありません。非常に残念な事です。……BOOGA」

金田金子は首を捻った。

「先生、『ブーガ』とは何ですか？」

絵瀬石雄院長は顔をしかめ、

「だから言ったでしょう、不明です、と。BOOGAMANIA患者が口走る戯言です。何の意味もありません。糞の意味も無いです。屁の価値もありません。唾の価値もありません。ゲップの価値もありません。目糞の価値もありません。鼻糞の価値もありません。耳糞の価値もありません。野糞の価値もありません。涙の価値もありません。フケの価値もありません。何だろう、と考えるだけ無駄です。……BOOGA」

「何故先生は『ブーガ』と言うんですの？」

絵瀬石雄院長は顔をますますしかめた。

「私が『ブーガ』なんて言う訳ないでしょう。言う理由が無い。私はBOOGAMANIA患者ではありませんからね。……B00GA」

金田金子は蒼白になった。

「でも、言ってるじゃないですか」

「いえ、言ってません。……B00GA」

「ほら、また言いましたよ」

絵瀬石雄院長は、眉間の皺をより深くし、

「奥さんは何故そんなアホな事を言うのです？ 私は『ブーガ』なんて言っていません。耳を診てもらった方がいいのでは？ ついでに頭も。口も。胸も。肺も。膣も。……B00GA」

「でも、また言いましたけど」

「言っていない、て言ってるだろうが！」

と、絵瀬石雄院長は噛み付く様な形相で叫んだ。顔面が、熟したトマトの如く赤黒くなる。「何故俺が『ブーガ』なんて無意味な事を言うんだよ？ ……B00GA」

「またおっしやいましたけど……」

「言ってない！ ……BOOGA」

と、絵瀬石雄院長は叫ぶと、席から立ち上がった。豪華絢爛で広大な上に悪趣味な院長室を、腹を空かせたグリズリーの様に旋回し始める。「俺は医者だ！ 世界屈指の医者だ！ いや、屈指どころか、世界最高の医者だ。世界の誰もが認めている。世界から喝采を浴びている。慶應医学賞、武田医学賞、アルバート・ラスカー医学研究賞、ノーベル生理学・医学賞、ノバルティス・リウマチ医学賞、林原賞、スルニア賞、信州医学賞、イグノーベル賞も、ゴールデンラズベリー賞も受賞している。俺はとにかく優秀だ。一〇〇年に一人しか生まれない天才だ。いや、今後現れる事は絶対無い大天才だ。大大天才だ。大大大天才だ。大大大大天才だ。世界最高の医者が『ブーガ』なんて無意味な事を口走る訳が無い！ ……BOOGA」

金田金子は、ますます蒼白になり、絵瀬石雄院長から距離を置いた。

絵瀬石雄院長は、豪華絢爛で広大な院長室の中を、バックフリップしながら行き来した。高価な調度品（実は業者が高く売り付けただけの安物・偽物）を、次々となぎ倒す。



## BOOGAMANIA (007) : 決別

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子は、げっそりした表情で我が家に戻った。

絵瀬記念病院の絵瀬石雄院長も、結局金田金太郎と同様の特別隔離室に放り込まれた。当然である。

BOOGAMANIAを発症した患者は、特別隔離室に放り込むしかないのだ。

「BOOGA」を連呼しながら駆けずり回る者を野放しにしていたら、危険極まりない。

ただ、BOOGAMANIA患者を取り押さえるのは並大抵の事では無い。

絵瀬石雄院長一人を取り押さえるのに、数百人の応援を必要とした。半数が殉職する事態に陥った。

特別隔離室に放り込まれた絵瀬石雄院長は、金田金太郎と同様、「BOOGA」と叫びながら室内を駆け回ったり、頭を壁や床に叩き付けたりしていた。

金田金子は、力無く革張りのソファ―実は合成革の安物を、老舗の家具メーカーがその伝統ある看板をいい事に中国のメーカーから取り寄せて自社製としたもの―に腰を下ろした。

―世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である自分が、何故こんな目に……。

……と、その時。

側の宝石（実は業者が『金持ちなんて皆馬鹿だから分からないだろう』と判断して買わせたガラスの紛い物）を散りばめた固定電話機が鳴り始めた。

金田金子は受話器を上げると、

「どなた？ 今、ちょっと手が込んでて……」

「金子さん？ 菓子代だけど」

「菓子代さん？」

超老舗菓子メーカー・黒福屋の社長令嬢魔髓菓子代だ。

社長令嬢とは名ばかりの、二目と見られぬブス。東大卒である事を自慢しているが、実際には裏金で入学し、裏金で卒業している。

食べるのが好きなくせに、ダイエットはしないので、日を迫うごとに体重が増している。来月には三五〇キロをマークするだろう。

ブスで馬鹿でデブ。

最低最悪のコンビネーションである。

それでも社長令嬢とあって、ちやほやされる。

世間の馬鹿振りが分かるというものだ。

金田金子は首を捻った。

何故魔髓菓子代が電話なんか寄越すのか。

また高だけで添加物どころか有害物質塗れの糞不味い菓子を開発したので買って欲しい、と言うのか。

「ああ、菓子代さん、何か御用？」

『……金子さんのご主人、病気なんだって？』

金田金子は驚いた。

どこでそんな情報を入手したのか。菓子屋の社長令嬢に過ぎないのに。

「ええ、まあ。ちょっと具合が悪くて、入院する事に……」

『BOOGAMANIAなんだって？』

金田金子は再度驚いた。

何故そんな事まで知っているのか。病院が情報を漏らしたのか？ 何の理由で？

「まあ、ええ。そんな病名だと聞いてるけど……」

『大丈夫なの？』

「まあ、その……、治療に時間が少々かかるみたいだけど……」

『そうじゃなくて、あなたよ。あなたは大丈夫なの？』

「え？ どういう意味？」

『ご主人がBOOGAMANIAにかかったんでしょ？ 感染している可能性は無いの？』

「BOOGAMANIAは感染症じゃないから、感染の可能性は無い、て事だけど……」

『でも、ご主人を診察した病院の院長もBOOGAMANIAを発病したんでしょ？』

「ま、まあ、そう聞いているけど」

『ほんの数時間接していた医師が発病するんだから、感染症、て事でしょ？』

「ま、まあ、そういう考えも出来るかも知れないわね」

『金子さんはご主人と一緒に住んでたんでしょ？ 接していた時間も長かった。だから金子さんも感染している可能性は高い』

金田金子は受話器を抱えたまま飛び上がった。

「そ、そんな訳ないでしょう！ あたしはBOOGAMANIAなんかにかかっていない！」

『かかっているけど気付いていないだけでは？』

「そ、そんな筈ない！」

『BOOGAMANIA患者は、発症しても自分がかかっている事を否定するそうよ』

金田金子は腹が立った。

老舗、という看板以外は糞の売りも無い菓子業者の社長の娘の分際で、世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である自分にあれこれ言うなんて。

「でも……」

『とにかく、金子さんとは暫く会えないわ。BOOGAMANIAを移されたら困るから』

「あたしはBOOGAMANIAなんかじゃない！」

『まだ発症していないだけの可能性もある。病原菌のキャリアとして、他人を感染させる可能性がね』

「そんな事ある訳ないでしょう！」

『金子さん、さようなら』

と、魔髓菓子代は言うど、電話を切った。

金田金子は、受話器を叩き付ける様に下ろした。齒軋りする。

――糞不味い菓子屋の馬鹿娘の分際で世界最大のIT企業グループ――ネズミコー・グループ――の若き総帥の金田金太郎の妻であるあたしに絶好宣言するなんて！ 失礼にも程がある！

電話が再び鳴り始めた。

――陳謝の電話ね。土下座させた上で許してやろう。

金田金子は受話器を上げた。

『金子さん？ 鬱子だけど』

魔髓菓子代ではなかつた。

大手パチンコメーカーYONKY0の社長令嬢玉鬱子だ。

社長令嬢とは名ばかりの、アホ女。あまりのアホで、裏金を積んでも三流大学にすら入学させてもらえず、アメリカとスペインとエチオピアの四流大学への留学でお茶を濁した。

アホでも、容貌が良かったら、まだ救いはある。

しかし、玉鬱子は、キュービズムに凝っていたパブロ・ディエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピーアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソが描いた女性の様な容姿だ。美容整形も、ある程度の土台がなければ効果は望めない。玉鬱子にはその土台すらなく、どうしようもない程のブスだった。

ブスでアホ。

最低最悪のコンビネーションである。

それでも社長令嬢とあって、ちやほやされる。

世間の馬鹿振りが分かるというものだ。

金田金子は首を捻った。

何故玉鬱子が電話なんか寄越すのか。

催眠効果と依存性をより先鋭化した新機種を開発した、と報告しに電話を寄越したのか。

『……金子さんのご主人、病気なんだって？』

金田金子は驚いた。

どこでそんな情報を入手したのか。パチンコ屋の社長令嬢に過ぎないのに。

「ええ、まあ。ちょっと具合が悪くて、入院する事に……」

『BOOGAMANIAなんだって？』

金田金子は再度驚いた。

何故そんな事まで知っているのか。病院が情報を漏らしたのか？ 何の理由で？

「まあ、ええ。そんな病名だと聞いてるけど……」

『大丈夫なの？』

「まあ、その……、治療に時間が少々かかるみたいだけど……」

『そうじゃなくて、あなたよ。あなたは大丈夫なの？』

「え？ どういう意味？」

『ご主人がBOOGAMANIAにかかったんでしょ？ 感染している可能性は無いの？』

「BOOGAMANIAは感染症じゃないから、感染の可能性は無い、て事だけど……」

『でも、ご主人を診察した病院の院長もBOOGAMANIAを発病したんでしょ？』

「ま、まあ、そう聞いてるけど」

『ほんの数時間接していた医師が発病するんだから、感染症、て事でしょ？』

「ま、まあ、そういう考えも出来るかも知れないわね」

『金子さんはご主人と一緒に住んでたんでしょ？ 接していた時間も長かった。だから金子さんも感染している可能性は高い』

金田金子は受話器を抱えたまま飛び上がった。

「そ、そんな訳ないでしょう！ あたしはBOOGAMANIAなんかにかかっていない！」

『かかっているけど気付いていないだけでは？』

「そ、そんな筈ない！」

『BOOGAMANIA患者は、発症しても自分がかかっている事を否定するそうよ』

金田金子は腹が立った。

所詮賭け事を騙ったインチキで儲けているだけの三流企業の社長の屑娘の分際で、世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である自分にあれこれ言うなんて。

「でも……」

『とにかく、金子さんとは暫く会えないわ。BOOGAMANIAを移されたら迷惑だから』

「あたしはBOOGAMANIAなんかじゃない！」

『まだ発症していないだけの可能性もある。病原菌のキャリアとして、他人を感染させる可能性がね』

「そんな事ある訳ないでしょう！」

『金子さん、さようなら』

と、玉鬘子は言うど、電話を切った。

金田金子は、受話器を叩き付ける様に下ろした。齒軋りする。

―パチンコ屋の屑娘の分際で世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻であるあたしに絶好宣言するなんて！ 失礼にも程がある！

電話が再び鳴り始めた。

―陳謝の電話ね。土下座させた上で、靴の裏を舐めさせた後に許してやろう。

金田金子は受話器を上げた。

『金子さん？ 続紀だけど』

魔髓菓子代でも、玉鬘子でもなかった。

巨大自動車メーカーのヨタヨタ社長令嬢利凍流続紀だ。

社長令嬢とは名ばかりのカス女。これまで何度も覚醒剤や麻薬所持・使用で逮捕されているが、父親が警察やマスコミに圧力をかけて握り潰させている。

ブスの薬中女。

最低最悪のコンビネーションである。

それでも社長令嬢とあって、ちやほやされる。

世間の馬鹿振りが分かるというものだ。

金田金子は首を捻った。

何故続紀が電話なんか寄越すのか。

リコールされるべき重大欠陥を握り潰せた、と報告しに電話を寄越したのか。

『……金子さんのご主人、病気なんだって？』

金田金子は驚いた。

どこでそんな情報を入手したのか。自動車屋の社長令嬢に過ぎないのに。

「ええ、まあ。ちょっと具合が悪くて、入院する事に……」

『BOOGAMANIAなんだって？』

金田金子は再度驚いた。

何故そんな事まで知っているのか。病院が情報を漏らしたのか？ 何の理由で？

「まあ、ええ。そんな病名だと聞いてるけど……」

『大丈夫なの？』

「まあ、その……、治療に時間が少々かかるみたいだけど……」

『そうじゃなくて、あなたよ。あなたは大丈夫なの？』

「え？ どういう意味？」

『ご主人がBOOGAMANIAにかかったんでしょ？ 感染している可能性は無いの？』

「BOOGAMANIAは感染症じゃないから、感染の可能性は無い、て事だけど……」

『でも、ご主人を診察した病院の院長もBOOGAMANIAを発病したんでしょ？』

「ま、まあ、そう聞いてるけど」

『ほんの数時間接していた医師が発病するんだから、感染症、て事でしょ？』

「ま、まあ、そういう考えも出来るかも知れないわね」

『金子さんはご主人と一緒に住んでたんでしょ？ 接していた時間も長かった。だから金子さんも感染している可能性は高い』

金田金子は受話器を抱えたまま飛び上がった。

「そ、そんな訳ないでしょう！ あたしはBOOGAMANIAなんかにかかっていない！」

『かかっているけど気付いていないだけでは？』

「そ、そんな筈ない！」

『BOOGAMANIA患者は、発症しても自分がかかっている事を否定するそうよ』

金田金子は腹が立った。

欠陥車をCM攻勢によって無知な購買者らに大量に売り付けているだけの三流自動車メーカーの社長の益暗娘の分際で、世界最大のIT企業グループーネズミコー・グループーの若き総帥の金田金太郎の妻であるあたしにあれこれ言うなんて。

「でも……」

『とにかく、金子さんとは暫く会えないわ。BOOGAMANIAを移されたら非常に迷惑だから』

「あたしはBOOGAMANIAなんかじゃない！」

『まだ発症していないだけの可能性もある。病原菌のキャリアとして、他人を感染させる可能性がね』

「そんな事ある訳ないでしょう！」

『金子さん、さようなら。達者でね』

と、利凍流続紀は言うと、電話を切った。

金田金子は、受話器を叩き付ける様に下ろした。齒軋りする。

——シェアだけが世界規模の、三流自動車しか作れない自動車屋の益暗娘の分際で世界最大のIT企業グループ——ネズミコー・グループ——の若き総帥の金田金太郎の妻である自分に絶交宣言するなんて！ 失礼にも程がある！

電話が再び鳴り始めた。

——陳謝の電話ね。土下座させた上で、靴の裏を舐めさせ、伝統的なイギリス料理をたらふく食わせた後に許してやろう。

金田金子は受話器を上げた。

『奥様でしょうか？ イッテバカリです』

BOOGAMANIA (008) : 譲渡

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻である金田金子は、受話器から一旦耳を離して見つめた後、また耳に当てた。

「……何でしょう？」

夫の秘書であるオベッカ・イッテバカリが、

「奥様、ネズミコー・グループ本社に来ていただけますか？」

金田金子はネズミコー・グループの若き総帥の妻だが、本社を訪れる事はそうそう無い。

「私が？ 何故？」

『とにかく、本社に来ていただきたいのです。総帥室まで』

何故図体がでかいだけの無能な黒人女性秘書如きが総帥の妻を本社に呼び付けられるのだ、と反発したかったが、夫の事があるので、あれこれ言う気になれない。

「分かった。直ちに向かうわ」

と、素っ気無く言うと、受話器を下ろした。

今日は車で行ったり来たりと面倒臭い。

何故世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻が、庶民の様に市内をあたふたと駆け巡らなければならないのか。

金田金子は、二〇〇億円の建築費をかけて築いた豪邸―建築費の殆どは関係者の懐に収まっていて、実際にかかっている費用は一億円にもならない欠陥建築―から出た。

外では、世界最高の腕を持つとされながらも、実は白内障と緑内障を患っているショファーが、マイバッハ62Sの横で待機していた。金田金子の姿を見て、後部ドアを大きく開く。

金田金子はさっさと乗り込んだ。

ショファーが運転席に乗り込み、マイバッハ62Sを発進させる。

豪邸と本社の距離は、五〇〇メートル程度。歩いてでも行ける。

世界最大のIT企業グループ―ネズミコー・グループ―の若き総帥の金田金太郎の妻なので、そんな距離でさえ徒歩で移動する必要は無い。

マイバッハ62Sは、ネズミコー・グループ本社ビルの前で停まった。

ネズミコー・グループ本社ビルは、高さ二〇〇メートルの、世界最高ビル―万全な地震対策が施されていると謳われながらも、実際には手抜き工事のお陰で震度六弱程度の地震で基礎から崩壊する代物―である。

金田金子は下車すると、ビルに入った。

スイスに本社を置くシンドラー社が技術の髄を結集して特別に開発した総帥専用の超高速エレベータで、最上階―八〇階―にある総帥室まで上がった。

総帥室はビルの最上階を占める広大な空間だ。贅の限りを尽くしたロココ様式・バロック様式・アンピール様式・ビザンツ様式・ロマネスク様式・ゴシック様式・スターリン様式・ボザール様式の装飾品により、サングラスをかけていないと目がチカチカする。

身長一八五センチの黒人女性秘書―オベッカ・イッテバカリ―が、金田金子を出迎えた。

「奥様、よく来ていただきました」

と、恭しく会釈する。

金田金子は怪訝そうに、

「何故呼び出したの？」

「重大なお話が」

と言うと、オベッカ・イッテバカリはサッと横に移動した。

総帥室の中央を占める大テーブルが姿を現す。

マホガニー製―と言われながらも、実際にはフィリピン産のスギ材に発癌性物質を含有するケミカルコーティングを施してこしらえた安物―のテーブルを、胡散臭い男共が囲んで腰を下ろしていた。

ネズミコー・グループの重役である。

全員が、成果主義を言い訳に従業員の給料を極力抑制しながら、自分らは成果主義を理由に毎年ボーナスを倍増させている上、政府や業界関係者に対する贈収賄で巨万の富を不正蓄財している。

「おかけになって下さい、奥様」

金田金子は疑問に思いながらも、空いた席——エルゴノミクスを取り入れたドイツ製とされながらも、実は長期間使用すると骨盤や背骨を不可逆的ににまで歪ませるミャンマー製——に、腰を下ろした。

「今日は何の用ですか？」

最年長で、顔面の毛穴という毛穴から最も胡散臭さと脂が滲み出ている男性——副総帥の裏切讓——が、

「単刀直入に言います。総帥を退任させ、新総帥を選出したいと思います」

金田金子は顔色を失った。

「何故？」

「総帥は病に倒れたとか」

「た、確かに病を患いましたが、直ぐ復帰しますので」

「BOOGAMANIAと聞きましたが。不治の病の」

——何故それを知ってるの？」

と、金田金子は驚きを隠さずにはいられなかった。

「どうしてそれを……」

裏切讓は、金田金子を遮り、

「どこで知った、なんて関係無いでしょう。BOOGAMANIAにかかってしまった以上、復帰は不可能です。不治の病ですからね。総帥としての職務を果たせない以上、退任してもらわないと、業務に支障が出ます」

「業務に支障が出るとどうなるの？」

「ネズミコー・グループは倒産します」

「倒産しちゃうの？」

「ええ。数万人の従業員が失業します」

下等な従業員（というか社蓄）が失業しようと、野垂れ死にしようと、彼女に関係無い。

「他に何かあるの？」

「資金難に陥りますね。金がなくなる」

「お金がなくなっちゃうの？」

それは困る。贅沢が出来なくなってしまう。

「ですので、新総帥を選出します」

どうやって選出するのか。

金田金子は見当すら付かなかった。

「それは……、仕方ないですわね」

「ただ、新総帥が単なる重役会の長だけでは、ネズミコー・グループを統括するのは無理です」

金田金子は、話がどこへ向かっているのか、さっぱり分からなかった。ただ頷くだけだ。

「……そうでしょうね。どうすればいいんでしょう？」

裏切譲は、間髪要れずに、

「保有株を譲渡していただきたいのです」

金田金子は面食らった。

「譲渡？」

「無論、全てとは言いません。総帥としての力を発揮出来る程度の株を譲渡してもらいたいのです」

譲渡というと、無償で何かを与える事を意味する。何故無償、つまり何の見返りもなく株を手放さなければならないのか。

そんなに欲しいのなら、金を出しなさい、と思った。

「で、でも……」

「新総帥の件を早期に解決しないと、ネズミコー・グループは危機に陥ります。そうなったらどうなるか分かりますか？」

経営について針の先程の知識すら無い金田金子が、分かる訳がない。誰からも天才と言われていたが、金で買収されて言わされていただけで、実は救いようのない馬鹿なのだ。九九さえ未だに覚えていないし、曜日の順番も正確に把握していない。

「どうなるんでしょう？」

「ネズミコー・グループは破綻します」

「破綻したらどうなるの？」

「従業員は全員解雇されます」

無能で下等な従業員（というか社畜）が何人解雇されようと、彼女の知った事ではない。

「それだけ？」

「会社は消滅します」

金田金子は蒼くなった。

消滅するという事は、このビルも無くなってしまうのか？ そう頻繁に訪れないが、無くなっては困る。他人に自慢出来るものが減ってしまうのだ。

「更に、保有株は紙切れ同然になります」

「紙切れ同然？」

「そうです。紙切れ同然。糞の価値も無くなります」

「糞の価値も無くなる……」

「屁の価値も無くなります」

「屁の価値も無くなる……」

「唾の価値も無くなります」

「唾の価値も無くなる……」

「ゲップの価値も無くなります」

「ゲップの価値も無くなる……」

「目糞の価値も無くなります」

「目糞の価値も無くなる……」

「鼻糞の価値も無くなります」

「鼻糞の価値も無くなる……」

「耳糞の価値も無くなります」

「耳糞の価値も無くなる……」

「野糞の価値も無くなります」

「野糞の価値も無くなる……」

「涙の価値も無くなります」

「涙の価値も無くなる……」

「フケの価値も無くなります」

「フケの価値も無くなる……」

それは困る。

糞の価値も、屁の価値も、唾の価値も、ゲップの価値も、目糞の価値も、鼻糞の価値も、耳糞の価値も、糞の価値も、涙の価値も、フケの価値も無い物を大量に保有していたところで、何の得もしない。

「あと、会社が無くなって、株も糞の価値も無くなってしまったら、奥様は只の人ですよ」

「只の人？」

「奥様は現在ネズミコー・グループ総帥金田金太郎の妻ですよ？ しかし、会社が無くなってしまえば、奥様は単に金田金太郎という人物の妻になります。金田金太郎はそこに転がっている無能で下等な庶民と何ら変わらなくなる。無論、奥様もそこに転がっている無能で下等な庶民と何ら変わらなくなります」

金田金子は蒼白になった。

年商数十兆円の大企業グループーゴウマン・インターナショナル・グループーの会長令嬢で、ネズミコー・グループ総帥の妻が、何故そこらに這い蹲っている無能で下等な庶民と何ら変わらない身分に落ちぶれなければならないのか。

「そ、それは……、まずいです」

裏切譲は、深刻そうな表情を見せ、頷いた。

「そうですよね。ですから、保有株を譲って下さい」

「は、はあ。分かったわ」

裏切譲は、どこからかA4サイズの紙を出し、金田金子の前に置いた。

「保有株を新総帥に譲渡する、という内容の契約書です。署名・捺印をお願いします」

「署名と捺印……」

「さあ、早くしないとネズミコー・グループは破綻します。そうなったらどうなるか、知っていますよね？」

「株が紙切れ同然になる……」

「そうです。糞の価値も無くなります。屁の価値も無くなります。唾の価値も無くなります。ゲップの価値も無くなります。目糞の価値も無くなります。鼻糞の価値も、耳糞の価値も無くなります。糞の価値も無くなります。涙の価値も無くなります。フケの価値も無くなります。奥様は総帥の妻では無くなる。そこに転がっている無能で下等な庶民と何ら変わらなくなります」

それは困る。どうにか阻止せねば。

金田金子は、エルメスのショルダーバッグ——フランスの職人が最高級の皮を使って、一品一品丁寧に作っているとされながらも、実は中華人民共和国福建省徳刑務所の刑務所労働者が最低級の皮を使って適当にこしらえた模造品——から、細金細工が施されたペンと象牙の判子（いずれも偽物で、金も単なる鍍金）を出した。

紙面に目を向ける。

漢文かと疑いたくなる程漢字に塗れた文章が、顕微鏡を使ってやっと読み取れるサイズでプリントされてあった。

辛うじて読み取れるのは、一番上の『保有株の譲と契約書』というタイトルだけだった。

「何て書いてあるの？」

「株を譲渡する為に必要な文言を書いています」

「こんなに難しく書かなきゃ駄目なの？」

裏切譲は、小馬鹿にする様に、

「難しいですか？ ごく当たり前の契約書ですよ。非常に簡単な文章です。小学生でも理解出来ます。いえ、幼稚園児でも理解出来ます。いえ、胎児でも理解出来ます。こんな単純な文章を理解出来ないのは底無しの馬鹿だけでしょう」

金田金子は背中を蹴られた気分になった。

「え？ ああ、そうね。理解出来る、理解出来る。全部理解出来る。なるほどね」

とぼやくと、紙に下に引かれた線の上に署名し、判を押した。「これでいいの？ これでネズミコー・グループは破綻しない？」

裏切譲は、満面の笑みを浮かべ、

「破綻は免れます」

「株は紙切れ同然にならない？」

裏切譲は、満面の笑みを維持したまま、

「なりません」

「あたしはそこらに転がっている無能で下等な庶民じゃないのね？」

「違います」

金田金子はホッと胸を撫で下ろした。

「良かった、良かった」

「有難うございます」

「……で、新総帥は誰になるの？」

「私です」

と、裏切譲は当たり前のように言った。笑顔をキープしている。

「え？ そうなの？ ……おめでとう」

「有難うございます。帰ってもいいですよ、奥様」

「ああ、そう。帰るわ」

と、金田金子は立ち上がると、総帥室を後にした。